
アスクレピオスの種

癒得

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アスクレピオスの種

【Nコード】

N9789E

【作者名】

癒得

【あらすじ】

人々を助けるために作られた物が悪に利用され汚されてしまう。

壱重

五年前ある男が発明をした。発明したのは機械の種。

それは人体に入れると体中を神経のように根をはりめぐらせ、体の悪い部分を治し健康な状態を維持する物。

それから二年、何の問題もなく人々を幸せにしてきた。

全身麻痺で動けなかった子供や下半身不随で立ち上がれなかった人、ありとあらゆる人を助けた。

だが一人の悪がある事を言った。「軍事用の物を作ろう」たくさん悪が一人の悪に賛成した。

男は反対した。ただ人を助けたかっただけなのに。

そして軍事用の物を作る事に決定した。それでも男は反対を続けた。

反対して……反対して……死んだ。

「正義博士は不慮の事故で亡くなられました」

真実はわからない。ただ、研究は悪に引き継がれた。

「愁裏先生、種はもうすぐ出来上がります、ですが……」

「なんだ？」

「適合者の入手がまだ出来ていません」

「あせらんでいい、3年かかってるんだ、いまさら失敗できるか……確実に完成させればいいのだ」

機械の種は軍事用に改良され、もはや完成の目前。

軍事用にするために種は張り巡らされる根の量を増やし、根を太くし強度を高められた。

もとからあった治癒能力に加えて、量を増やした事で筋力の補助がされ力が強大になり、強度を高くした事で衝撃や銃弾にも耐えら

れる体になる。

「完成すれば、まさに金のなる木の種だ」

「ですがもともと誰にでも適合できたのに、改良した事で一部の人間にしか適合できなくなりました。皆、欲しがるのでしょうか」

「欲しがるさ、世の中戦争が大好きな奴がいる、そういうやつはより強い兵士を欲しがる、勝つためにな」

ははははは！ と愁裏は高笑いをした。

復讐に燃える適合者が今悩んでいた。

将博は家族を殺されて、でも復讐できるほど自分は強くない。

そこへ種の研究をしているとか言う男がやってきて、研究の手伝いをしてくれたら力をやると言われた。

「……くそっ」

そして夕日の中を将博は住所が書かれたメモ用紙を握り締め歩き始めた。

「先生っ、適合者が入手できましたっ」

入手できたという言葉聞いたとたん愁裏の顔が凶悪な笑顔で歪む。

「そうか、取引に応じたという事が、つれて来い」

はいっ、と助手がドアの外に出て行く。

愁裏はクククと笑っていた。

「つれてきました」

助手に入るように言われ将博は研究室に入る。

髪が少し長く茶色がかっている、14歳ほどの少年。愁裏が事前に聞いていたとおりだ。

この子が種に適合できるかもしれないと思うと、早く試したくてしかたがない。

それでもその気持ちを抑え将博に話しかける。

「よく来てくれた、まずは礼を言おう」

少しだけ頭を下げたあと、話を続ける。

「最初の約束通り、君に力をあげよう、そのかわりここで手伝い……いや、働いてもらう、それから……君の仇も探してあげよう」

「！ 探して……くれるのか？」

「ああ、一人では難しいだろう？それに君が探す事に集中するところまで働けない」

将博は黙って少し考えてから質問をした。

「力ってどんなものだ？」

「アスクレピオスの種は知ってるかな？」

「あの……病気とか怪我とか治るやつ？」

「そう、医療用の機械の種だ、それを軍事用に改良した」

よくわかっていない顔をしている将博を見て、愁裏は簡単な言い方に直す。

「体を強化できる機械に作り変えたんだ」

「……だいたいわかった」

「では、もう質問がなければ、さっそく君に種を植えよう、来てくれ」

歩き出した愁裏の後ろを将博と助手がついて行く。

研究室がある建物から外に出て少し歩いたところに、小さな建物が立っていた。そこに入って行く。

中は以外に頑丈そうな作りでそう簡単には壊れる事がなさそうだ。真ん中にはベッドが置いてあるだけで他には何も置いていない。

「このベッドに座ってくれ」

将博は言われるままベッドに腰掛ける。

白衣のポケットからヒマワリの種のような銀色の物を取り出した愁裏は後ろから将博の頭と首の間の所にそれを押し付けた。

「い
つ
い
だ」

押し付けられた所に痛みが走る。

「これで植え付けは終わった」

「え？　これだけか？」

「これから根が体に広がる、それでは我々は明日になったらまたここに来る、それまでここにいるんだ」

それだけ告げると愁裏と助手は外に出て行ってしまった。

外から鍵を閉める音がする。

「なんで鍵なん……いてて」

鍵を閉める音が聞こえなくなった時、種を植え付けた場所が痛み始めていた。

「いた……いな」

どんどん痛みは大きくなっていく。

「うっぐあ」

痛みで体に力が入らなくなり、床に転げ落ちる。

「う あ あ あ あ あ あ あ あ」

さらに痛みは大きくなり激痛が全身に広がっていった。

「先生、予想よりはるかに痛みが大きいです」

外にまで聞こえてくる叫び声を聞きながら愁裏に話しかける。

「これでは痛みによってシヨック死するかもしれません」

「死ねばまた改良すればいい、多少変えるくらいならすぐできるからな」

「ですがもっと時間をかけて根を広げた方が死亡率は低くなるのでは？」

「人間の心は脆いのだよ、長時間苦しめば体は死ななくても心が壊れる」

「そうですか……」

愁裏の話を聞いて助手はそのまま黙ってしまった。

何十時間も体中に走っていた激痛がやっと治まった。

種を埋められてからどれくらい経ったのかわからない、ただ体を動かすとまだ痛みが残っている。

将博が虚ろな目で一点をボーッと見てしていると鍵を開ける音が聞こえた。

「生きているか？」

「……ああ」

愁裏の後ろのドアから助手が入ってきて

将博に近づき支えながら立たせると、最初いた研究所まで連れて行かれた。

「これで君は力を手に入れたんだ」

笑顔で将博にそう告げ、布で包まれた長細い何かわからない物を見せる。

「君がその体に慣れた頃これをやろう」

そう言つて愁裏はその長細い物を持つてきたところになってしまう。

「それから今日から君は^{ひとえ}壱重と名乗れ」

「ひと……え」

「壱重、今日は休め、明日から仕事をしてもらおう」

自分の部屋を聞いた壱重はよろよと研究室を出て行く。

「成功しましたね」

「あとはテストと実験を重ねるだけだ」

うれしさが隠し切れないように愁裏は歪んだ笑顔を浮べていた。

「ですが適合者の入手はどうします？」

「もう回りくどい事はいい、壱重にさらってこさせる」

「わかりました」

「適合者になら百%成功する事が証明できれば、金が手に入る」

ははははは！ と笑った顔には悪意が満ちて歪んでいた。

あたりが明るくなった頃、壱重は目が覚めた。昨日の痛みが嘘のように消えている。

ほんとに変わってるのか心配になるほど何も無い。

壱重は少し歩いてみようと思っ部屋を出た。

研究室がある建物の端に位置する部屋は外への出口が遠い。出口までの道のりを歩いている途中、体が軽い事に気付いた。

少しの変化でも苦しい思いをした分嬉しくなる。

やっと着いた出口から外に出るとまず思いつき走り走ってみた。

「すごい！ こんなに速く走れるなんて」

人間ではありえないほどの速さで走れている。

今度は止まろうとすると、勢いが消えずにこけて転がってしまっ
た。

「まだ慣れていないようですね」

いつの間にか愁裏の助手がいて、壱重に声をかけてくる。

「頼みたい仕事があります、先生の部屋に来てください」

研究室には愁裏が待っていた。

「やあ壱重、体に不調はないか？」

「ああ、体が軽いくらいだ」

「ならいい、頼みたい仕事はな……こいつを誘拐して来い」

そう言っ一枚の紙と写真を手渡される。

「誘拐？ どういうことだ？！」

「我々に必要なんだ、壱重、君が拒否すれば君の苦勞が水の泡だよ」
「なんだと？」

「仕事をしないのなら約束は果たせない、それに君の中の種も取り除く、ああ取り除くといつてもこちらで消滅信号を送るだけで種は機能停止する、仇もとれず弱い将博に逆戻りだ、さあどうする？」

愁裏の顔は悪意に満ちた歪んだ笑顔になる。

壱重はすぐに答えが出せなかった。

「……わかった」

その返事を最後に感情を捨て、

冷酷無比な“壱重”になる事を固く決意し、研究室を出ていった。

しばらくして助手が愁裏に疑問を投げかける。

「消滅信号なんて聞いてませんよ？」

「ははははっ、そんなものない、壱重を操るためだ、

やはり子どもは扱いやすい」

そしてまた悪の犠牲が増えた。

華式

壱重は一ヶ月で何人も何人もさらってきた。その人たちはみんな種を植えつけられ死んでいった。

痛みに耐えられなかったようだ。

それにより愁裏は種を改良する事を決定。

壱重は何も言わず次の命令を待つだけだった。

「どこかにいい男いないかなあ」

沙耶^{さや}は退屈そうな声をあげる。

今日は二十歳の誕生日なのに誰も祝ってくれる人がいない。

「一人暮らしは寂しいなあ」

気晴らしにケーキでも買いに行こうにも一人で食べるなんて悲しすぎる。

「さびしいなあ……死んじゃおうかな」

「じゃあ俺と来てもらえないですか？」

「え?! なっ誰?! ……もしかして死神とか?!」

真っ黒な服を着ている壱重は本当に死神の様だ。

「確かに死神のようなものかもしれませんが」

「……ねっ、どこでも連れてっていいからその代り今日一日付き合ってよ」

沙耶は笑顔で壱重の腕に強引に抱きつく。

壱重はかなりの美形でここで逃したらもう出会えないかも知れない。

そんな事を考えた沙耶は無理やり話を進める。

「決まりっ行こ、ね!」

「まって……ください」

そんな声で沙耶を止められる事はなく、家の外に連れ出された。

「どこ行く？ どこ行く？」

ウキウキとした声を出しながら壱重を引っ張っていく。完全に沙耶のペースに引き込まれていた。

「……ところでその長いやつはなに？ 鎌とか？」

壱重が左手に持っていた紫色の袋に入った長細い物を指差す。

「いえ、俺が強くなるための……大切な物です」

「ふふん……ところで町の方に行くからね」

もう周りには店が増え始めている。

「あつこの服かわいいい、どう？ 似合うかな？」

「似合う……と思います」

「これは、これは」

沙耶はものすごい勢いで服を見て体に合わせて壱重に見せていく。今、服を見ていたと思ったら今度は雑貨屋に入っていた。

「これかわいいい、これもかわいいい」

それからいろいろな店に入って見て、また入って見て。

「あの、すこし休憩を……」

「もう疲れたの？ しょうがないなあ、じゃあ……あそこのカフェ入ろう」

2人は近くにあったオープンカフェに入る事にした。席に着くと店員が注文を聞きに来る。

「私はミルクティー、で君は？」

「あ、じゃあ……クリームソーダで」

「ぶつ、ふふつ、以外に子供ね」

店員も少し笑いながら店内に戻って行く。しばらくすると注文の品が運ばれてきた。

「……ねえ、連れて行かれちゃったらやっぱり帰ってこれないよね」

「はい、おそらくは」

「そつ、それならそれでいいかな……もう嫌になってたから」

2人の間に沈黙が流れる。

「ケーキ買って帰ろう……一緒に食べてくれるよね？」
「はい、それくらいなら」

「ふうーおいしかったあ」

沙耶は買ってきたケーキをほとんど自分で食べてしまった。

「どうして、嫌になってしまったんですか？」

「……幸せな気分なのにどうして聞いちゃうかなあ」

「すいません」

しょうがないなという感じで沙耶は話し始める。

「私ね、一人ぼっちなの、お母さんとお父さんは離婚して私を置いてどっか行っちゃった、十五歳くらい時だったかな、誰も私を助けてくれなかったから生きるために働いて、高校も行つてないからまともに雇ってくれるところもない、私はこれからずっと一人ぼっちなのかなって思ったら嫌になっちゃった……」

ポロポロと沙耶の目から涙がこぼれる。

「もう……一人は……嫌だから、連れてって……一人じゃなくなるなら」

壱重は沙耶を薬で眠らせて愁裏のところまでつれてきた。

「めずらしく時間がかかったじゃないか」

「……はやくすませてください」

「言われなくてもそのつもりさ」

愁裏は離れの建物に助手が沙耶を連れて行かせる。

壱重は自分の部屋に戻ると持っていた紫色の袋から中身を取り出す。取り出したものは日本刀だった。

自分の愛刀をしばらく眺めたあと鞘から引き抜く。

「強さとは……なんだ」

刀を振り上げ何度も素振りをする。

「俺は強くなれたのか」

さらに素振りのスピードを上げた。

「俺には何も出来ない」

それから壱重は何も言わずただ刀を振り続けた。

沙耶に種を植え付けてから丸一日が立った。

壱重は沙耶のいる部屋の扉を開く。ベットの上に沙耶は横たわっている。

「起きてください」

苦しみの声をあげていたのが嘘の様に沙耶は寝息を立てて寝ていた。

「ん……だれ？」

「俺です」

「……君は誰？」

「まさか記憶が？」

本当に誰なのかわからないらしい。

「誰なの？ 知り合い？」

「俺は壱重です」

「ひとえ……私の事知ってる？ わからないの」

少し考えたあと壱重は口を開く。

「あなたは華式はなぶたそれしか……いや知ってる事が一つだけ」

「なあに？」

「もうあなたは……一人ではありません」

「先生、記憶を失ったようです」

「そうだな、だが貴重な成功だ」

「次の適合者は見つけてあります」

五香

月三つきみと月四つきよという男の子達が来たのは華式が来てから少し経ってから。

二人は他人だったが、同じ境遇に苦しんでいた事から同じ字をつけられる。

その苦しみから二人を助けたのは愁裏だった。

「僕らを生まれた時から寝たきりの状態から救ってくれたあなたは救世主だ」

「だから愁裏様、あなたに一生の忠誠を誓います」

それを聞いた愁裏はまた道具が増えた事を喜んだ。

種の事を知りたいという金持ちの客が愁裏の所に来ていた。

「愁裏君、今の時代、普通の事だけじゃ物は売れないよ」

「どういうことでしょう？」

「この種にしかできない特別な能力やウリがなければ買えないって事だよ」

愁裏は危うく客を殴り倒しそうになる。

何とか我慢していると、金持ちの客は散々文句を言ったあと帰って行った。

「ちっ、あのクソ野郎これで改良した種をはした金で買おうとしやがったら生まれてきた事を後悔させてやる」

「愁裏様あの客、殺しますか？」

月三と月四が愁裏に問いかける。

「お前らはバカかっ！ やつが消えれば、かなりの騒動になる、……そんな事、忝重なら言われなくてもわかるぞ」

「すいません……」

重い空気になってしまった研究室に壱重と助手が入ってくる。

「ああ、壱重、君に頼みたい仕事がある、行ってくれるか？」

「はい」

そのまま壱重と愁裏は部屋の外に出て行ってしまった。二人に続いて助手も出て行く。

研究室には月三と月四だけとなった。

「壱重はなんであんなに信頼されているんだ」

「僕らの方が愁裏様への忠誠心が高いのに」

壱重への二人の不満は高まりはじめていた。

今年で十歳になる少女が夕方、防犯ブザーを握り締めて歩いていた。

帰りの会で最近、誘拐が多いから注意しなさいと言われたからだ。「防犯ブザーがあるから大丈夫だよ」

夕方になるまで寄り道をした事を後悔しながら恐る恐る歩いていった。

「もうすぐ家だよ」

自然と笑顔がこぼれる。

その時、後ろから口を押さえられ防犯ブザーを鳴らす暇もなく少女は連れ去られてしまった。

愁裏は壱重に取りに行かせていた書類を受け取り見ていた。

「先生、それは何ですか？」

「これは過去発表された論文だ、使えるものはないかと思ってね」

「なにかありましたか？」

「熱を吸い取る、なんてどうかね？」

「熱……ですか」

助手は種にそういう機能を付けるのが可能かどうか考える。
吸い取った熱をどうするかといろいろ問題点もありそうだがや
つてみる価値はありそうだ。

「君はいつも通り適合者を探すんだ」

「はい、わかりました」

「壱重つ、今忙しいかな？」

「どうしたんですか？」

笑顔で話しかけてきた華式は真剣な顔つきになる。

「外ってどうなってるの？ 私は昔、外にいたんだよね？」

壱重以外は外出禁止となっていて華式は記憶を失ってから一度も
外に出ていない。

外への期待を持ち、万が一、外に出てしまったら脱走とみなし、
壱重が脱走者を処分しなければいけないため、極力、外の情報を教
えていないのだ。

「やっぱり教えてくれない？」

「すいません……教えられません」

そこへ二人が話しているところに通りかかった助手が話しに割っ
て入ってきた。

「壱重さんに仕事があるんですが、一人では大変だと思うので華式
さんもついて行ってください」

「いいの？ じゃあついてくっ」

「ちよつと待つてください、愁裏に相談しないで決めていいんです
か？！」

「大丈夫です、行つてきてください」

助手は資料を渡すと研究室のほうに戻っていつてしまった。

「さあ、行こっ」

華式は壱重の腕を強引に引つ張って行く。

この強引さは変わってないなと思いつながら壱重は華式についていた。

もらった資料に適合者は十歳の少女で誘拐されたと書いてある。

「人身売買組織につかまった子を助けに行きます」

「そんな悪いやつらが外にはいるんだね……」

壱重はそれ以上何も言わない。

華式に世界の汚れた部分は見てほしくなかった。

そのうち壱重のやってきた悪事も知られて嫌われるかも知れない。女の子が捕まってるのはここかな？」

周りに何も無い所に建っている大きめの倉庫。資料に書いてある住所はここで間違いない。

少女を誘拐した組織は誘拐以外にもかなり悪い事をしているらしい。

誘拐した子を人質にその家族からありったけの金を取ったあと、その家族を呼び出し殺して内臓や売れる部分を売り、最後に誘拐した子を生きたまま金持ちにおもちゃとして売る。

「恨まれると厄介だから組織は壊滅させるように……か」

資料を懐にしまいながら壱重はため息をつく。

「華式さん、さすがに俺たちでも大変ですから作戦を……」

ズバァァァァァン

その音の先では華式が扉を蹴り破っている姿があった。

「誘拐した子を開放しなさいっ」

さああい、さああい、さああい。

建物にその声が妙にひびいた。

その場にいた者全てが呆然と華式を見つめる。数秒の沈黙が流れた後それを破ったのは建物の中にいるうちの一人だった。

「なんだってめえはあぁっ」

「女の子を助けにきたのよっ」

華式はそのまま中に強引に入ろうとする。そこにいきなり銃声が響き華式は倒れた。

「！ 華式さんっ、大丈夫ですか?!」

壱重は華式に駆け寄り、声をかける。

「うん…… 大丈夫、びっくりしただけ…… こういう体なの忘れてたよ」

華式はゆっくり起き上がり撃たれて血が出ている額をさすった。

弾は皮膚の表面を傷つけただけ。

「なっなんで撃たれて生きてんだ」

華式に向かって銃を撃った男が後ずさる。

「華式さん…… 俺が奴らの相手をするのでその隙に女の子をお願いします」

「わかった」

そう言うのと建物の裏に向かって華式は走りだす。

残った壱重は左手に持った刀に手をかけヒュッと一気に引き抜いた。

建物の裏に回ったきた華式は入れる場所を探していた。

「入れる所は……」

見つけたのはちょうど人が小さくなれば入れるくらいの窓。

息を潜めて窓から中を確認するとちょうど誰もいない。壱重がうまくやってくれているという事だ。

「女の子はどこにいるのかな……」

一番近くにあったドアを試しに開いてみる。

「あっ」

部屋の隅にうずくまって震えている女の子が一人。

「よかった……大丈夫？何もされてない？」

華式が話しかけても震えながらうずくまっているだけだ。

「怖かったね、大丈夫、私はあなたを助けに来たの」

助けに来た、という言葉に震えていた少女は初めて反応した。華式は少女のそばに近づきゆっくりと抱きしめる。抱きしめられ今まで我慢していた涙がポロポロとあふれだした。

「よくがんばったね、安心して、私がついてるから……」

少女はもう金持ちに売られるだけだったらしい。

それをわかっていてか華式と一緒にいられればどこへでも行くと言った。

そして熱を吸い取る能力が追加された種を植え付けられ、新しい名前をもらう。少女は五香と言う名前になった。

五香（後書き）

次は最終話です。少し時間を置くかもしれません。

吉重は雷霆（らいてい）の様に（前書き）

最終話です

壱重は雷霆（らいてい）の様に

夜の月に照らされながら壱重は研究室がある建物から出た所で剣術の練習をしていた。剣術といつてもどこかの流派ではなく我流の技。当然優れた技ではないため身体能力の高さでごまかしている。

壱重が少し休憩をしようと刀を鞘に納めようとした。

そこに何かが壱重にぶつかってくる。

「?!」

とつさにその場から壱重は横に跳躍した。

「誰だ？」

そこに立っていたのは月三と月四の二人。その二人の腕には頑丈そうな籠手（こて）がはめられている。

「どうして君達が攻撃してくるんだ？」

どうして攻撃されたのか壱重は見当がつかないといった感じた。「証明するためですよ、僕らとあなたのどちらが強く愁裏様の役に立つか」

それだけ言うと二人は壱重に向かってくる。

壱重は二人の攻撃を避け、隙ができたところに峰打ちで攻撃を入れた。二人は何度攻撃しても同じように避けられ攻撃される。

「くそつ、お前なんかただの嘘に恐れて従っているだけの臆病者のくせにっ」

「あつ、おいつ、それは言ったらダメだっ」

月三が慌てて月四をたしなめる。

「嘘……?」

壱重は月四の言葉を聞き逃していなかった。

その瞬間、壱重は月四との距離を一瞬で詰め、刀を首に突き付ける。

「嘘とはなんだ？ 何を知っている？」

普段から冷たい目をしている壱重の目がさらに冷たい目になる。

その目を見た月四は腰が抜け、地面に座り込んでしまった。

「知っている事を話せ」

「き、機能停止する信号なんてものはない、と愁裏様が……」

「他には？」

「仇を……」

「まてつつ、月四つつ、ダメだっ」

月三が必死になって続きを言わせないようにする。

「黙れ」

壱重が睨みつけると月三は小さく悲鳴を漏らし黙った。

「話せ」

さらに刀を首に食い込ませ月四に迫ると恐る恐る話し始めた。

「おねえちゃん」

「ん？ どうしたの？」

華式は一緒にベッドの中にいる五香に聞き返す。

「ここから……出たいよ」

「この研究所から？」

「うん……どうして出たらダメなの？」

「それは……」

五香の問いかけに華式は顔を曇らせ本当の事を話すか迷う。

「それはね、博士が悪いことをしていて私たちが外に出るとそれがバレちゃうから出ちゃダメって言ってるの」

「……やっぱりいけない事してるんだ」

脅えた顔を浮かべる五香を華式が抱きしめた。

「脱走しちゃうおつかっ？」

「え?!」

「ここから出たいでしょ？ それにここにいても意味がないし」
「煮え切らない様子で唸る五香。」

「脱走しようっ、決定っ、行くよっ」

「決定?! い、今から?!」

華式はいつも通り勝手に決めて強引に腕を引っ張って部屋を出て行く。その二人の話を聞いていた者が見つからないようにその場を離れていった。

研究室へつながる廊下。そこを全てを聞いてしまった壱重は歩いていった。

「愁裏が、ヤツこそが俺の仇!!」

月四の話では壱重の家族を殺したのは愁裏だという。

愁裏は適合者を手に入れるために動かせる駒がほしかった。そこで壱重の家族を殺し、仇を探してやる事を条件に実験台にして、働かせるために機能停止すると脅し働かせた。

「愁裏っ!!」

怒りにまかせて壱重は研究室の扉を思いっきり開ける。

「どうした? もっと静かに開けないのか?」

「お前が俺の家族を殺したのかっ」

「ふっ、訳のわからないことをいうな」

何を馬鹿なことを言っているというような顔で否定する。

そこに月三と月四が入ってきて愁裏の前に立ちはだかった。

「愁裏様大丈夫ですか?」

「それより貴様らが話したか? 貴様らに壱重の秘密を話した覚えはない、

なぜ知っている?」

小さい声で二人に問いかける。その時、建物が揺れるほどの爆音があった。それも一回ではなく連続で。

「なんだ!?!」

愁裏が窓から外を確認すると他の建物が発火しながら燃えている。

「くそっ、どういうことだ！」

今度は研究室のある建物で爆発がおこったのか、立っていられないような揺れかたをした。その混乱に乗じて壱重が愁裏に斬りかかる。

「ぐあっ」

ポタポタと落ちる血液。揺れによつて狙いが定まらなかったために愁裏は顔を斬られただけだった。

「愁裏様っ！！」

月三と月四がそばまで駆け寄り、愁裏を支える。

壱重は刀を握りなおし構えた。それに答えるように月三と月四も立ち上がり構える。そしてお互い同時に攻撃を仕掛けた。

「なんで爆発してるの?! おねえちゃん何かしたの?!」

「知らないよお、何これえ」

華式と五香は敷地の外から燃え上がる建物を見上げていた。研究室のある建物は比較的火が少ない。

「こんなに燃えてて他の人大丈夫かな……」

「おねえちゃん……壱重さんが心配?」

「な?! なんで壱重になるの?!」

「好きなんでしょ?」

火の光に照らされてすでに顔が赤かったのにさらに赤くなった。

「なっ、何言ってるのっ」

こういうときでも恋愛の話をするとか赤くなってしまう素直な華式。助けに行く?どこにいるかわかんないけど……」

そんな華式の顔を覗き込みながら五香がたずねると華式は顔を横に振る。

「かなり火が回ってるし危ないよ、壱重ならきつと大丈夫」

「そう……」

そして二人はまた建物を見上げて壱重の帰りを待った。

月四は傷だらけで倒れている。

その横にボロボロになった月三が立っていた。

すでに研究室にも炎が燃え移り、その中で戦っている。少しずつ壱重が近づいていく。もう立っているだけでやっとの月三の前まで進むと刀の柄頭でミゾオチを打つ。

「うっ」

小さなうめき声とともに崩れ落ちた。

そのまま壱重が視線を移した先にはまだ燃えていない壁にもたれかかって座っている愁裏がいる。

「壱重……知ってるか？アスクレピオスは死者をも蘇らせてしまうほどの医学の才能を持っていたそうだ。だが世界の秩序を乱す者と言われ雷霆で撃ち殺された。君はその雷霆の様だな、私を裁く雷」

愁裏は自嘲の笑いを浮べる。

「命乞いをするかと思っていた」

座り込んだ愁裏を冷たい目で見下ろす壱重。

「普段から後悔などしないようにしている、いつ死んでもいいようになる」

人を殺しておいて後悔はないという。

その言葉に壱重はさらに怒りを深める。

「今すぐお前を斬り殺してやりたい、だがそんな楽な死に方では生ぬるい」

刀がカタカタと鳴るほど握り締め憎しみのこもった声でそう言った。

「炎が迫ってくる恐怖に震え、後悔しろ」

鞘に刀を納めながら振り返り入り口に向かう。

「ハハハ！後悔などしないと言っただろう。フッハハハハハハ！」

研究室を出てすぐに中から何かが崩れ落ちる音がした。それでも笑い声は続いている。

壱重は振り向くことなく脱出のために走り出した。

外で待っている二人はあきらめかけていた。建物はもう完全に炎に包まれていて生きていてももう脱出できそうにない。

「壱重……」

華式が目をつぶり祈るように呟く。

その時建物の一階の窓らしき所から何かが飛び出してきた。

「だれ?! 壱重さん?!」

「刀持つてる……壱重っ」

華式は走りだし、出てきた壱重に抱きついた。

「大丈夫?」

「大丈夫ですよ」

その言葉を疑うように五香が壱重の肌に触れる。

「すごい熱……今から熱を吸い取るからおねえちゃんは離れて」

「ダメだ、吸い取った熱は体にたまってしまってから五香が熱で倒れてしまいかもしれない」

「でも……なら少しだけにするから、お願い、やらせて」

少し黙ってから壱重は溜め息をつく。

「しょうがない、少しだけ……ね?」

「うん、わかった」

五香は壱重の肌に触れたまま目をつぶる。

「Absorption《吸い取って》」

熱を吸い取る能力は自分の意思でスイッチを入れられない。そのため特定の言葉を五香の声で言う事でスイッチを入れたり切ったりできるようにされた。

「五香そろそろ」

「end《終わって》」

「ありがとう」

壱重は五香の頭をなでる。

「五香大丈夫？　ちよつと熱いよ？」

「大丈夫だよ、おねえちゃん」

少しだけ回復した壱重を二人がかかえて敷地内から出て行く。

「これからどうしようか……」

華式が少し不安そうな顔をする。その不安を打ち消すように微笑む壱重。

「大丈夫ですよ、とりあえず遠くへ行つて……そこで自警団みたいなものを作つて困つてる人を助ける……なんてどうですか？」

「ハハツいいかもね」

嬉しそうに華式が笑つた。つられて笑う五香。

三人はフラフラと歩き続ける。

その先には少しずつ朝日が上りはじめていた。

「君達の力もつと見せてもらうよ」

三人から見えない位置であの爆発を起した者呟き、三人に背を向け歩き始める。

その三人はフラフラしながらも力強い目で朝日を見つめているのだつた。

……どんな困難にも負けない力強い目で。

吉重は雷霆（らいてい）の様に（後書き）

どうでしたでしょうか？あまり上手くないですが、最後まで読んでいただきありがとうございます。SFは難しいですね、大変でしたがいい経験になりました。空想科学祭はまだ終わりませんので楽しんでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9789e/>

アスクレピオスの種

2010年10月8日15時16分発行